

# レポート相互評価法—大学における授業実践の試み

石橋 潔

## Mutual Evaluation Method for Report writing: A lesson practice in University

Kiyoshi ISHIBASHI

**【要約】** レポート相互評価法とはレポートの評価を学生自身の相互評価によって実施する方法である。この方法は、だれのレポートをだれが評価しているのか分からない形で実施し、その評価を得点化する。この方法を繰り返し実施することで、学生に創意工夫を生かしたレポートを書く動機付けを与え、評価者の視点に立ったレポート作成能力を学ばせることができる。またこのとき教員の役割は、学生に評価者の視点を育て共有させていくことに重点を移す。

**【キーワード】** 相互評価, 授業実践, レポート指導

### 1. はじめに

この論文では、レポート相互評価法と名付けた方法を紹介する。この方法は、学生が書いたレポートの評価を学生自身の相互評価によって実施する。この相互評価法では、だれのレポートをだれが評価しているのか分からない形で相互評価を実施し、その評価を得点化する。このように匿名化することで100人規模の比較的大人数の授業でも実施できる。この方法を繰り返し実施することで、学生は評価者の視点に立ったレポート作成能力を学ぶことになる。

大学での学習は自分で問題を設定し、自分で解き、それを他者に納得してもらえるように伝える能力の育成に重点があるはずである。レポート課題は、この点で大学の学習に適している。レポートを書く際に学生は、与えられたテーマに関して、自分で問題を設定し、根拠を示しながら自分なりの結論にたどりつく必要がある。大学ではそのため、小中高時代に比べ、○×式の試験ではなく、レポート課題が多く課せられる。そしてこのようなレポート作成能力は、卒業論文などの大学での学習の集大成に結びついていく。

しかし、このレポートを書く能力を育てるためには、どのような教育を実施すればよいのだろうか。

レポートを書く能力は、一律に学生に指導することが難しい性質を持つ。そもそもレポートは○×式の試験になじまない自由度の高いテーマを扱うことが多い。このようなレポートの指導では、本来、学生の書いたレポート一つひとつに対して、教員が評価し、添削し、学生にフィードバックする必要がある。だがこの添削するという作業は教員に多大な労力を強いる。学生のレポートは、必ずしも、読みやすく、分かりやすいものではない。論理の飛躍もある。面白い考察が潜んでいても、その面白さを十分に表現できていない場合も多い。また学生のレポートには、多様な観点から評価されるべき、個性的な内容が書かれる。このようなレポートを、教員一人が多面的に公平に評価するのは大変な労力である。

このようなレポートの添削にかかる労力のために、多くの大学でのレポートの指導は、一律に形式的な側面だけの指導か、または少人数のゼミなどで行われるだけになっているように思われる。また大規模な授業では最終課題としてレポートを課したとしても、そのレポートは返却されず、学生にとってはレポートを出しっぱなしになっていることが多い<sup>1</sup>。

この論文で提示するレポート相互評価法は、教員一人が担っていたレポートを評価するという役割を、学生相互に受け持ってもらおうというものである。このことは学生の教育においても積極的な効果を持つ。

学生はこの相互評価法で、①レポートを書く、②レポートを評価する、③自己の評価を受け取るという3つの役割を経験することになる(図1)。学生はつまり評価者の視点を取得した上で、レポートを書く能力を身につけることになるだろう。

そしてこのような相互評価での教員の役割は「よいレポートとはどのようなものか」についての共通理解を育てるコーディネートに重点を移すことになる。

以下では、実際に実践した相互評価の方法とポイントを示し、大学の授業の中での有効性を示したいと思う。



図1 学生の経験する3つの役割

## 2. レポート相互評価法の基本的方法

相互評価とは学習の主体である生徒・学生自身が評価の主体となる方法である。教育の目的を学生・生徒の自己教育力や自己評価能力の育成におくならば、本来、学習の成果の評価は学生・生徒自身が行うべきであると言えるかもしれない(天野正輝 2006)。

しかし学生・生徒同士の相互評価の実践はそれほど多く試みられているとはいえない。報告されている相互評価は比較的小規模の閉じたグループかクラスの中で実施されたものであるようだ。つまり互いに顔と名前が一致する関係の中で、相互評価を行っている(安彦忠彦 2006)。このような相互評価は、そこで形成される人間関係の質に大きく左右され、そこで行われる評価がその学習成果そのものの評価なのか、そこで人間関係の評価しているのか分からなくなる欠点がある<sup>2</sup>。

この論文で提示する相互評価はこうした従来の方法とは異なり、匿名性を保証した中で実施する。つまりだれがだれのレポートを評価しているのか分からない形で実施する。典型的に言えば、固定的なクラスメートを持たないような大学の授業、しかも比較的大人数の授業の中で実施する。

だがそのためには、互いの評価を可能とする、より単純な仕組みとする必要がある。まず考えなければならないのは、学生が互いに評価しやすい仕組みにすることである。学生一人ひとりが、他の学生全員のレポートを読み、評価するというのは現実的ではない。多人数の授業で学生同士による相互評価を行う場合、学生が評価可能なレポート数にする必要がある。これまでの経験では、学生の評価するレポートを5~15レポート数に限定する必要がある<sup>3</sup>。この程度のレポート数に限定することで、学生はそれぞれのレポートを読み、どれがよりよいレポート内容か、相互に比較して評価できるようである。

100人のレポートが提出された場合を考えてみよう。すべての学生が100のレポートを読み評価を下すのは労力がかかる。そこでそれぞれの学生が評価できるように、たとえば8つのレポートのランダムな組み合わせを100人分作り、それを学生に提示する。学生は自分に割り振られた8つのレポートを読み、比較して評価する。その学生の評価を集計し、それぞれのレポートごとに評価得点を算出する。

1) 具体的手順

レポート相互評価法の具体的手順を以下の①～⑤に示す。

**①課題設定**

レポート課題を提示する。

〇〇についてレポートせよ。A4 1枚

〆切〇月〇日

学籍番号と氏名は用紙裏に記入すること

相互評価ではレポートを匿名化するため、氏名などをレポート本体に記載させないほうが楽である。

**②組み合わせ作成**

ランダムに組み合わせを作る  
例：裏表で8枚のレポート

5	99	表
27	34	
92	1	裏
19	55	

**③相互評価**

学生に評価させる

レポートを読み、1位から8位まで順位を付けてください。またそのように評価した理由を書いてください

1位( 55番 )  
わかりやすかった

2位( 34番 )  
へーと思った

3位( 27番 )  
.....

8位( 1番 )

**④評価の算出**

表計算ソフトで計算

レポート番号	平均順位	標準偏差	100点換算
1	2.5	.32	85
2	6.5	.22	65
3	7.4	.01	55
4	4.5	.56	75

**⑤評価のフィードバック**

学生に評価を返却する

あなたのレポートの評価は  
62点  
標準偏差は±10点

最優秀レポートを以下に載せるので参考にしてください

〇〇について

.....

図2 相互評価の具体的手順

①課題設定

レポート相互評価法では、まず当然のことながら学生に対してレポート課題を提示しなくてはならない。レポート課題は、どのようなテーマ、内容でも構わない。ただし評価のための組み合わせを作るためには、あまりレポートのページ数が多いものはコピーして組み合わせ

せを作るのが難しくなる。100人程度の授業で相互評価を行う場合には、用紙1枚に収まるような分量に指定しておくほうがよいかもしれない。

また学生に対して、相互評価法でレポートを評価すると伝えておく必要がある。筆者の授業では次のように学生に伝えている。「あなたのレポートを他の学生が読んで評価します。他の学生に“へえ、なるほど”と思ってもらえるように書きなさい」。

## ②組み合わせ作成

提出されたレポートは、相互評価のために匿名化する。氏名などがレポート本文に記載されている場合はその氏名などを消去し、その代わりレポート番号として連番を書き込む。

そのうえで、学生に評価させるためのレポートをランダムに組み合わせで作成する。学生が時間内に評価可能なレポート数を設定し（おおよそ5～15程度のレポート）、そのランダムな組み合わせを作る。今までの経験では、1200字程度のレポート8つを学生に評価させる場合、30分ほどの時間を必要とするようである。レポート数を8つとした場合、100人の授業での相互評価は、8つのレポートのランダムな組み合わせを100個作ることになる。

## ③相互評価

組み合わせたレポートと評価用紙を学生に配布する。自分のレポートを自分で評価することがないように、配布したレポートの中に自分のレポートが入っていないことを確認させる。入っていた場合には、他の組み合わせと交換する。

そのうえで学生にレポートを読ませ、そのレポートについての評価を数値で記入させる。持ち点100点を各レポートに割り振る方法などでもよいが、筆者の授業ではレポートに順位

### 参考 組み合わせを作る方法

このレポート相互評価法は、比較的大人数の授業での応用を目指している。こうした方法が日々の授業の中で簡単に行えなければ実用的価値は低下する。特に複数のレポートの組み合わせを作ることが比較的難しいかもしれない。ここでは、筆者が授業で行っている方法を二つ提示しておく。

#### ① コピー機を使う方法

日常的にもっとも簡単にできる方法はコピー機を使う方法である。

- 1) 提出されたレポートに連番を打ち、
- 2) レポートの束をシャッフルして混ぜ合わせる。
- 3) 4枚集約両面コピーに設定し、レポートの束を原稿送りに載せコピーする。
- 4) 上記、2) 3) を学生人数分になるまで繰り返す。4枚集約両面コピーで8つのレポートの組み合わせを作った場合、8回繰り返すと学生人数分になるはずである。

#### ② プログラムを利用する

レポートの提出から評価、集計までをパソコン上で行うプログラムを作成すれば、これらの作業は自動化される。インターネット掲示板を作成する程度のプログラム技能があれば作成できるはずである。筆者も作成し、利用している。

図3 パソコンを使った相互評価システム

をつけさせている。8つのレポートを相互評価させる場合、よいレポートだと思った順に1位から8位までの順位をつけさせている。

#### ④評価の算出

③で実施した相互評価を表計算ソフトなどに入力し、レポートごとに平均得点を集計する。このとき、評価のばらつきの指標である標準偏差なども算出しておくといよい。

#### ⑤評価のフィードバック

学生にレポートを評価点とともに返却する。筆者の授業では、④で算出した評価の平均順位を100点満点の得点に換算し、学生に返却している。

またこのとき、評価のばらつきを示す標準偏差も記載して次のように学生に説明するとよいだろう。

「この標準偏差が大きい場合は、あなたのレポートをよいと評価した人と、よくないと評価した人がばらついていたことを示します。つまりあなたのレポートにはよい点もあったのでしょ。どのようなレポートをよいと評価するかは人によって、多少違いがあります。しかしできるだけ多くの人に、よいレポートだと思ってもらえるレポートを書くよう努力しましょう。」

### 3. 相互評価されたレポートの実例

ではこのように実施されたレポート相互評価は、妥当な評価結果となるのだろうか。

以下で示すのは主に1年生を対象とした授業（社会調査法Ⅰ・2009年度久留米大学・90名弱の受講者）で実施したレポート相互評価である。この授業では400字弱<sup>4</sup>のレポート課題の相互評価を3回実施している。

#### 1) 相互評価の実例—よい評価をうけたもの、よくない評価をうけたもの

この授業で2回目のレポートテーマは「50年前にくらべ、あの世を信じている若者が増えてきている。その理由を400字以内で分析して記述せよ」というものである。

このテーマに関して提出があった83のレポートを使い、ランダムな5つのレポートの組み合わせを学生人数分作成した。そして学生に読んでもらい、順位をつけてもらった。およそ評価時間は20分ほどである。

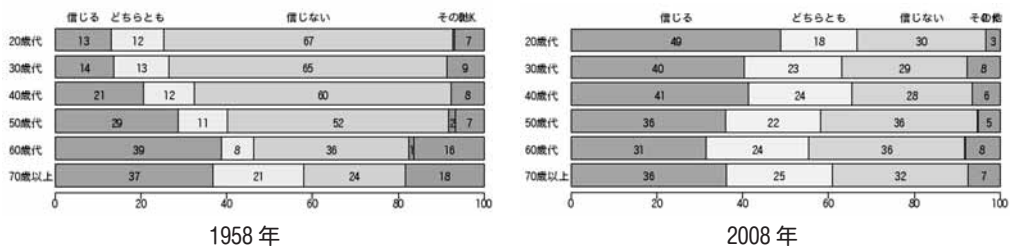


図4 あなたはあの世というものを信じますか（統計数理研究所 1958 2008）

評価例として、以下に評価が低かったレポートから高いレポートの順に並べている。(レポートは誤字なども含めて原文のままとしている。)

---

#### レポート①

あの世を信じるか否かということだが、まずは現在の若者の思考の向き方に注目したいと思う。

昔に比べて今の若者はメディア、つまり、情報に、それもありとあらゆるメディア媒介に触れる機会がある。

たとえば昔にはなかったゲーム、それに霊界のようなあの世を舞台にしたストーリー。

これらの中には“あの世”を身近に展開するものも多い。親近感のあるこういったメディアの影響でそれだけでも“あの世”は身近な存在になってしまうのだろう。

ゆえに少々強引かもしれないがそれがアンケートにも反映されたのではないだろうか。

73位 (83人中)

評価の平均順位 4.2

評価の標準偏差 1.3

---

#### レポート②

グラフで見るとおり2008年にはあの世を信じているのは若い世代のほうが多いが、信仰を持つ若い世代の人は少ない。1958年代の頃の若い世代の人も信仰を持つ若い世代の人は少ない。やはり宗教などは信じていない若い世代の人々が多くなってきているのではないだろうか。

しかし、あの世を信じる若い世代の割合は2008年時には約半数いるが、1958年は信じないほうの割合が半分以上占めている。

今、テレビなどで心霊写真や恐怖スポットなどが紹介されているので、そのせいもあるかもしれない。1958年代にはまだカメラなどもあまり普及していなかったと思われるので幽霊の存在などはあまり認識されていなかったのかもしれない。

60代や70代になると信じる信じないは、2008年・1958年とも約半数であった。年齢を重ねるにつれあの世を考えて生活する人と、考えずに現実を見つめて生活している人がでてきているのかもしれない。

48位 (83人中)

評価の平均順位 3.2

評価の標準偏差 1.1

---

#### レポート③

2008年と1958年の20代・30代とを比べてみると、「あの世」を信じている人数は、2008年が圧倒的に多い。これは、先が見えない今の時代だからこそ、何か確かなものを信じる傾向にあるのだと考える。

1958年頃の日本は、高度成長の真最中で科学や身の回りの面でも、前よりも確実に良くなっていて、いい方向に向かっている。精神的にも、今よりも人との関わり合いが希薄ではなかったこともあって、余裕がある、将来への不安がこの頃は以前と比べて減っていると考える。

現在は科学が発達していき、1958年よりも暮らしは確実に便利になって豊かである。しかし、20代・30代の時点で1958年ごろよりも、生活自体が不安定であり、人との関わり合いが希薄であることもあって、精神的な面で、不安の気持ちが大きい。あの世を信じる状況として、不況の中将来が見据えられなくて「不安」という気持ちが蔓延している状況があると考えられる為、2008年がより多く信じていると考える。

25位 (83人中)

評価の平均順位 2.6

評価の標準偏差 1.3

---

## レポート④

2008年の20歳代から40歳代のあの世を「信じる」回答が多いのは、日々ストレスや苦痛に感じることが多すぎ、あの世に行けば楽になれるという考えの人が増えてきているからではないだろうか。そのような考えを持つ人がいるので、苦しいと感じると立ち向かおうとせずに楽になろうと思えば自殺をする人がいるのではないか。1958年のグラフで、20歳代から40歳代さらに50歳代があの世を「信じない」と回答していた人の割合が半数を占めていたのは、戦後から間もない時代で多くの人が懸命に生きていこうとしていた時代だったのであの世を「信じる」と回答する人が少なかったのではないかと考えられる。今後も、あの世を信じたいと思う人は増えると思われるが、あの世を信じるのではなくこの世にも苦ばかりでないと信じることも大切である。

11位 (83人中)

評価の平均順位 2.0

評価の標準偏差 1.0

## レポート⑤

現代の若い世代が「あの世」を信じている割合が上昇した理由は、今の社会はストレス社会といわれるほど様々なストレスを感じている、そのため「あの世」という非現実的なものがあると信じることで生きていく拠り所とすることが出来るからであると考えられる。また、景気が悪いことも影響していると考えられる。なぜなら、1958年は岩戸景気が始まった年であり、景気が良かったので人々は「あの世」というものを気にすることもなく生活していた。しかし、現在は、リーマンショックによる不景気で派遣切りなどによって職を失った人や若者が将来に対する不安を抱くことで「あの世」というものがあると信じることで僅かでも希望を見出そうとしているのだ。だから、景気が良くなるまでこの傾向は継続するだろう。つまり、「あの世」を信じる人が増えたのは、ストレスや不景気から逃れ、日々の生活に少しでも希望を見出そうとしているからである。

1位 (83人中)

評価の平均順位 1.6

評価の標準偏差 0.5

さて、これらの相互評価の結果はどのようなものだろうか。

①のレポートは評価が低いレポートの典型例である。まずレポートの記述量が少ない。学生は指定された文字数より少ないレポートを低い評価にする傾向が顕著である<sup>5)</sup>。文字数を埋めることにそれぞれの学生が苦勞していることを反映しているのだろう。短い分量のレポートは手を抜いているとして低い評価になる。

②のレポートでは平均的な分量を書き込んでいる。しかし、レポートで求めた分析を書き込んでいるのは後半の半分に過ぎず、前半の記述は、結論を先延ばしにして、レポートの前提条件となっている情報を書いているに過ぎない。つまりレポートの問いに答えるための十分な書き込みが不足している。学生たちはこのようなレポートに対して評価を低めにつける。

③④のレポートでは、レポートの最初に結論が提示され、それを後に根拠づけるという「主張+根拠」のシンプルな構成で書かれている。

そして1位となった⑤のレポートでは、さらに根拠として、岩戸景気、リーマンショックなど、時事的な情報を調べて書きこんでいる点が評価されている。この1年生時点での学生相互評価では、専門用語・時事用語などの言葉を使うと高い評価を受ける傾向がある。つまり大人びた学生らしいレポートを評価する。

以上、学生の相互評価の結果を見てきたが、学生はレポートに対して、妥当な評価をしているといえるのではないだろうか。学生たちは書き込みの不十分なレポートを低い評価とする。また「主張+根拠」というシンプルな構成で書いたほうがよい評価となっており、下調べをし

て、事実関係を調べて書けば評価が高くなる。

## 2) レポート内容の改善がみられる典型例

このような相互評価を繰り返すことによって、学生たちにレポート内容の改善が見られる。以下に一人の学生のレポートの変化を示そう。この⑥～⑧の例は、大学1年生のレポート相互評価法によるもっとも改善がみられた学生の典型例である。同一の学生が3カ月の間に異なるテーマで3回書いたレポートである。⑥がもっとも最初で、⑧が3回目である。⑥は暴走族のフィールドワーク調査・インタビュー調査(佐藤郁哉 1985)を示して「暴走族にとっての20歳の意味」を考察させた400字以内のレポート。20歳になると「卒業」して暴走族を辞めると語るインタビューをもとに、その分析を記述してもらった。⑦は先に紹介した「あの世を信じる若者が近年増えている」現象について考察させたレポート。⑧は人口減少社会で「今後、必要性を増す仕事、減じる仕事」について考察させたレポートである。

---

### レポート⑥ 1回目のレポート課題

彼らにとって20歳とは、一つの区切りみたいなものだと私は思います。出会いがあれば別れもあるように、過去の自分との卒業という意味だと思います。今まで好き勝手やってきた彼らだけどこかでこういうことは卒業して、ちゃんと大人になって社会に出ないといけないという思いがあると思います。その卒業するという歳が20歳だと思いました。今の私にとって20歳とはと聞かれても、変わるものもなければなにかが始まったり終わったりするわけでもありません。何の変化もないまま私は20歳を迎えると思います。特に彼らみたいに20歳に特別な思いもありません。私にとってはただ歳をとるということと変わらないことです。20歳を一つの区切りとして、過去の自分と決別し自立して社会に出るためのものだと思います。そう考えると私も今のままでは駄目だと思います。今の自分を見つめ将来のことをちゃんと考えたいと思いました。

61位 (84人中)

評価の平均順位 3.6  
評価の標準偏差 1.7

---

### レポート⑦ 2回目のレポート課題

1958年のグラフを見るとあの世を信じない人が多いが2008年のグラフでは信じる人が多い。このことから今の日本の現状が見えてくる。1958年、今とは違いますがそこまで便利な世の中ではなかった。しかし今の世の中ほど発展していなかった 人の優しさや、暖かさがあったと思う。今の時代はものや機械が発展し便利になった分、そこから犯罪が増えた。前よりも物騒な世の中になったと考える。犯罪も前よりも手がこんだものとなり、安易に他人を信じてはいけない世の中になった。自己中の犯罪、利己的な考えによる犯罪。前よりも人の暖かみがなくなった。他人を心配する暇などなく、自分のことは自分で守らなければならない時代。だから人は他のものに縋りたいのだと思う。人は信じられない。けれど、なにかを信じたいのが人間。だから前の時代は人を信じていたが、今の時代では他のものに縋って信じているのだと私は考える。

59位 (83人中)

評価の平均順位 3.6  
評価の標準偏差 1.9

---



---

**レポート⑧ 3回目のレポート課題**

国勢調査に基づいた日本人の人口予測では、今後減少に向かうと予測されている。それに伴い第一次産業である農業、林業、漁業、鉱業の仕事が減っていくだろう。少子高齢化がさらに進み、就業者の高齢化や後継者の不足がより出てくるからだ。第一次産業が高齢化になると体力的にも限界がくる。それに天候や気温によって、大きく左右されやすい。体力が低下している高齢者には天候や気温、その他の災害があったときにすばやく対処が出来にくくなるだろう。そして、おそらく景気も悪くなると考える。そうすれば若者はより慎重に仕事を選ぶようになる。リスクが大きい第一次産業に就こうと考える若者は、そう多くないと考える。そのため今後、貿易の仕事が増え輸入品が増えてくるだろう。輸入品に頼るようになるため、貿易の仕事が活性化してくると予測する。

---

21位 (83人中)

評価の平均順位	2.4
評価の標準偏差	0.9

⑥のレポートでは、「です・ます調」の書き方になっており、また暴走族の20歳の意味を分析するレポートであるにも関わらず、「今の自分を見つめ将来のことをちゃんと考えたいとい(ママ) 思いました」という感想文になっている。レポートと感想文を区別できていないこのレポートは、84人中61位の評価となっている。

しかし2回目に実施した⑦のレポートでは、この学生は感想文の書き方を修正しており、分析的になっている。しかし下線部に見られるような根拠のない印象を書き連ねており、結論と根拠が明確ではない。したがってこのレポートはそれほど高い評価を受けることができなかった。

3回目に実施した⑧のレポートでは、この学生は、論理構成として「主張+根拠」という構成を使っている。また第一次産業の「後継者不足」という社会問題への言及がある。そのため21位(83人中)と急速に評価の順位を上げてきている。

この例は、この相互評価法を繰り返したなかで、学生のレポートが改善されていった典型例である。相互評価を繰り返すことで、学生は評価者の視点を取得しながら、次のレポートの改善につなげていることが分かるだろう。

### 3) 低く評価される平凡な内容のレポート

このレポート相互評価のもっとも大きな特徴は、平凡な内容のレポートよりも、オリジナルな着想を持つレポートが高く評価される点である。

レポート課題を課す場合、教員は学習を発展させた自由な発想のレポートを期待して課題を課すことが多い。だが多くの場合、このような教員の期待を裏切って、テキストの丸写しのような内容や、平凡な内容を書き連ねたレポートばかりが提出され、がっかりすることが多いのではないだろうか。

たとえば、日本で高齢化が進み人口減少する人口予測のグラフを学生に示し「今後の日本で、必要度を増す仕事は何か」について自由に考察させるレポートを書かせたとしよう。教員のねらいは、今後の日本に生じる大きな社会変動を様々に予測し、考えてもらうことにある。しかし正しい答えだけを求めがちな学生たちは、こうした自由な発想が不得手だ。このようなレポートテーマに対し、多くの学生は高齢者が増えるという連想から、「高齢者の介護が必要度を増す」と答える。この回答は、これはこれで正しい答えである。しかしこの回答は、多くの学生が思いつくという意味で平凡な内容であり、こうした回答しかないことは、教員のレポート

出題のねらいからすれば残念なことである。

では、これを相互評価した結果はどうなるだろうか。実際に実施したレポート相互評価の結果を示しておこう。

実際にこのレポートを課したときにも「介護」について言及している学生がもっとも多い(33人, 40%)。だが相評価を行うと、介護に言及したレポートは、介護には言及せず他のことに言及したレポートと比較すると、明らかに低い評価を受けている。

	人数	平均順位	±	標準偏差
介護に言及したレポート	33人 (40%)	3.42	±	0.75
介護に言及しなかったレポート	50人 (60%)	2.74	±	0.79
有意確率 $p=0.000 < 1\%$ (t検定)				

「介護」の仕事に言及したレポートは、相互評価において平均3.42位。この相互評価は5つのレポートに順位をつけてもらっているから、3位が真ん中である。つまり平均以下である。それに対して、介護には言及せず別の仕事に言及したレポートでは2.74位とより高い評価になっている。これらの介護に言及しなかったレポートでは、たとえば「弁当宅配」「自転車産業」「貿易業」「プライベートブランド創出業」「廃校リフォーム業」など多様なアイデアが提出されている。

多くの学生が思いつく介護のレポートが低く評価されるのは、平凡な内容のレポートが同じ内容のレポートの中に埋没するためである。相互評価する場合に同じ内容のレポートが複数現れれば、「あ、同じ内容か」と思うことになる。またその学生自身が「介護」について書いている場合、同じ内容で書かれたレポートを「へえ、なるほど」と感じることは少なくなる。このようなことが、平凡なレポートを低く評価する傾向を生み出しているようだ。

参考として、介護に言及したレポートと、そうでないレポートのそれぞれの平均順位に近いレポートを以下に掲載しておく。

#### ⑨ 介護の仕事に言及したレポート

今の日本の人口は1億3000万人と過去最大の多さだが、国勢調査の人口予測によると、これからの将来日本の人口は減少していくとみられている。人口が減ることはたいしたことではないのだが、問題なのは65歳以上の老年人口の割合が増えてくることだ。お年寄りが増えてくると、1人では暮らしていくことができな

63位 (83人中)

評価の平均順位 3.6

評価の標準偏差 1.3

い要介護者も増えてくる。そうなってくるとそのような人たちの面倒をみなくてはならない介護士やヘルパーがたくさん必要になってくる。ただでさえ今でも不足しがちな介護士だが、これからもっと増やしていくためにも介護士を育てる専門学校を増やしたり、若い世代がもっと介護に興味をもつように学校での授業に力をいれていくことも必要になってくると予測する。

#### ⑩ 介護以外の仕事（農業）に言及したレポート

国勢調査による日本の人口の動向と予測のグラフから、人口は今がちょうどピーク時であり、将来的に減少していく。そこで今後必要度を増す仕事は、農業だと考える。現在、農業に携わっている方の多くが高齢者であり、これからは、子どもが極端に少なくなり始める。また、高齢者が増えるので、子ども達とお年寄りの触れ合いの場が自然と増えてくる状況ができ、農業体験をする機会が増すと思う。さらに、10年後20年後に年をとっていく人々は今の不況の中、農業への関心が高く、食への安心・安全の考えは強い。地方で生産者の顔が見える直売所を通して地元の野菜や旬の野菜を買う人が増えているのも、安心な食への関心があるからだ。日本の現状を考えると、食料自給率は今後、今よりも関心が高まっていくに違いない。これらのことをふまえて、子どもが農業に触れる機会が増すと考えるので、農業は今後必要度を増す仕事だと考える。

30位 (83人中)

評価の平均順位 2.7

評価の標準偏差 1.5

つまり相互評価法では、平凡な内容のレポートではなく、へえ、なるほどと思ってもらえるレポートが高く評価される。この点がこのレポート相互評価法を用いる場合の最大の利点である。

このことを○×式の試験と比較すればこの利点は明確である。○×式のような教育評価は、学生に唯一の正解だけを学習する動機づけを与える。だがここからは、多様な発想やアイデアを生み出す動機づけを与えることは難しいだろう。相互評価法は、内容が興味深く、納得いくものを評価するという視点を学生に与える。そして、学生それぞれが、そうしたものを書きたいという動機づけを持つことができれば、レポート課題は独自の発想と説得力を競う場に変化するだろう。

#### 4. 「よいレポート」についての評価基準を作り出す試み

以上のようにレポート相互評価法が一定の妥当性と効果を持つことを示してきた。しかしこのような効果はレポート相互評価法を単に繰り返すだけで生じるわけではない。むしろ重要なのは評価の視点を育てる教員の指導である。教員は、学生集団に「よいレポートとは何か」についての共通理解を生み出すよう指導することが重要である。そうでないと、レポート相互評価は単なる人気投票になってしまう。

以下に示すのは、レポート相互評価法で実践している指導方法である。このような方法を併用することで、学生の評価基準を育て、共有させていくことができる。

##### 方法Ⅰ レポート課題出題の意図を明示する

まずもっとも基本的なことは、レポート課題を出題するときに、そのレポート出題の意図を学生に明確に伝えることである。単なる自由な感想を書いてほしいのか、あるいは、ある方法を用いて分析をしてほしいのか、文献資料をデータにして自説を展開してほしいのかなどである。またこれらの出題の意図は、その講義の学習の目的と関連させて説明する必要がある。そうでないと学生は、まったく自由な形式で、また無目的に文字数を埋めるためだけにレポートを書き始めてしまう。

## 方法Ⅱ 過去のレポートとその評価を事前に紹介する

レポートを書くにあたって、学生に目指すべきレポートのイメージを伝えることは重要だろう。レポート課題を提示するにあたって、具体的なレポート例を提示すると効果がある。

たとえば相互評価を数年のあいだ繰り返すと、過去のレポートが蓄積される。そのようなレポートを、課題を提示するときに参考として示すのである。たとえば、この論文で紹介したレポートを評価とともに学生に示すことができるだろう。そしてこれらのレポートがよい理由、悪い理由を指摘し説明することで、学生は事前によりレポートとは何かについてイメージを形成することができるだろう。

しかもレポート相互評価の場合、レポート例を提示しても、その丸写しのような、同じアイデアのレポートばかりが提出されることにはならない。レポート相互評価法では、平凡であたりまえな内容が低く評価される。つまりレポート例を提示することによって、学生はそれとは異なる内容のレポートを考えなくてはならない。

## 方法Ⅲ 基準となるダミーレポートの挿入

レポートとしての合格最低条件を明確にしておくことは重要である。そのための方法として、教員の用意した基準となるダミーレポートを、相互評価するときに混ぜる方法がある。たとえば過去に評価された60点水準のレポートなどを、相互評価のときに学生に分からないようにして混ぜるのである。そして事前に次のように宣言しておく。

「60点水準のレポートを、みなさんに分からないように相互評価のときに混ぜます。このレポートよりも低い得点となった場合は、そのレポートは60点未満の点数となるので、これを上回るようにレポートを作成してください。」

そして60点ラインレポートのおおよそその特徴を、見本となる類似のレポートを示しながら述べておくと効果的である。例えば「60点ラインレポートは、ここで示すように、例えば誤字が3か所あり、結論も平凡です。また、ですます調とである調の文体がまじっています。また参考資料も1つしか調べていません。おおよそこのようなレポートを相互評価のときに混ぜますので、これを上回るようにしてください。」

学生にとっては、達成する水準が明確であるほうが、それを超えようとする具体的な行動を行う。従来のレポート課題は、達成水準があいまいなことが多く、そのため字数を埋めてレポートを提出することを目指す学生が多数現れる。そのような学生に向けて、超えるべきレポートの水準をこのような形で示すと、劇的な効果がある。

## 方法Ⅳ 評価基準のポイントを示す

評価させるときには評価するためのポイントを提示すると、学生はそのポイントを意識

以下の点に注意しながら、レポートを相互評価しなさい。

- ・誤字脱字はないか。レポートにふさわしい文章を書いているか
- ・段落の書き方や禁則処理、数字やアルファベットの書き方は適切か
- ・「へえ、なるほど」と思える内容か

以下のレポートを「事実・資料を報告している箇所」「意見・考察を書いている箇所」に下線を引きながら読み評価しなさい。

- ・「事実・資料」と「意見・考察」がバランスよく書かれているか
- ・「意見・考察」は「事実・資料」に基づいて納得できるか
- ・誤字脱字はないか。レポートにふさわしい文章を書いているか
- ・「へえ、なるほど」と思える内容か

表1 学生に提示する評価ポイント例

して評価を行うようになる。とくに学生がこの相互評価に慣れていない場合は、いきなり「よいレポートと思う度合を評価してください」というよりも、いくつかの評価ポイントをあげておくほうがよいように思う。

表1は実際に実施した相互評価で提示したポイントである。

#### 方法V 相互評価法を繰り返す

学生の評価基準を育てるためのもっとも重要な方法は、この相互評価法を繰り返すことである。相互評価法は1回だけ実施しても効果がない。レポートを書く、評価する、評価を受けるというプロセスを繰り返す中で、学生は評価者の視点を取得して、レポートを書くことができるようになる。相互評価法は繰り返して実施しなくては効果ない。

### 5. 相互評価の繰り返しを組み込む授業実践

このようなレポート相互評価法は、さまざまな授業に応用可能である。

以下では、この相互評価法を組み込んだ著者の授業例を紹介する。1) 大学初年次におけるレポートの書き方を中心とした導入教育、および2) 大学3年次における小論文の指導、3) レポート指導を直接の目的としない専門科目での応用、の3つである。

#### 1) 大学初年次レポート指導授業「総合情報社会論」

この授業はレポートの書き方を中心とした大学での学び方を指導する授業である。開講年次は1年次前期で約80名が受講している。

この授業の目的は、入学して間もない1年生に大学でのレポートの書き方を理解してもらうことにある。この授業ではフィールドワーク調査や文献調査で得たデータを使って、他の学生に「へえ、なるほど」と思ってもらえるようなレポートを書いていけるようにする導入的授業である。そのためにこの授業ではレポート相互評価法を3回から4回実施している。

まず1, 2回の相互評価は、レポートという課題と相互評価法に慣れてもらうことを目的としている。まずテーマを提示し、そのテーマについて書かれた先輩のレポート（高い評価のものと低い評価のもの）を読ませて、解説した後に、同じテーマで400字以内のレポートを書かせ、翌週に相互評価を実施している。まだこの時点では、レポートを書くということに慣れておらず、また評価を受けるということ自体に慣れていない。そのために、比較的自由に書けるテーマを選んで書いてもらっている。

4月14日	情報社会学科オリエンテーション
4月21日	レポート①：「情報活用能力で大切なこと」
4月28日	相互評価① レポート②「チームワーク問題解決のために」
5月12日	合川地区フィールドワーク事前準備
5月19日	合川地区フィールドワーク事前準備
5月26日	合川地区フィールドワーク レポート③
6月2日	図書館での文献調査方法
6月9日	図書館での文献調査方法
6月16日	図書館での文献調査方法
6月23日	レポートの書き方（形式の指導） 及びレポート相互評価②③
6月30日	レポートの書き方（形式の指導：参考引用の書き方）
7月7日	最終レポート提出
7月14日	レポート相互評価（最終）
8月5日	表彰式と打ち上げ

表2 総合情報社会論授業スケジュール

3 回目のレポートは、フィールドワーク調査、つまり地域観察を実施したうえで、レポート(1000字)を書かせている。このレポートでは、観察調査にもとづくデータを提示して、結論を書いてもらう。多くの場合、学生はデータと結論を関連させる必要に気が付いていない。そして観察したことについての感想文を書いてくる。このレポート課題では、この点の修正が最大の目的である。

4 回目のレポートは、文献調査にもとづいて、1000字~1200字のレポートを作成させている。テーマは「久留米のもう一つの素顔」。このテーマに関して、他の学生に「へえ、なるほど」と思ってもらえるような内容を文献調査によってレポートを書いてもらう。そしてこの総合評価をもとに、表彰式を実施し、優秀作品を表彰している。

このようにレポート相互評価法を用いることで、学生に最終的な目標を与えたうえで、レポート指導を行うことができる。

## 2) 3年次を対象とした小論文指導「現代社会論文制作演習」

レポート相互評価法は、小論文の指導にも効果的である。この授業は大学3年次に開講しており、社会的なテーマを題材に、800字から1200字程度の小論文を書けるようになることを目指す授業である。大学3年次には就職活動などで小論文を書くことになることが多く、またマスコミ志望の学生も一定数いる。小論文執筆に対する学生の意欲が高まるこうした時期に、この授業を開講している。受講生は30人弱程度である。

授業ではテーマを毎週発表する。そのテーマに関する小論文を次回の授業の2日前までに提出してもらい、相互評価のための組みあわせを作成しておく。昨年度のテーマ一覧は表3のとおりである。

一つの授業はおおよそ2部構成である(表4)。前半は相互評価、後半は相互評価の講評と書き方のポイントについての講義である。この授業では授業時間内に相互評価を集計し、結果を発表している。そして最後に次の小論文のテーマを発表して授業を終了する。

この授業のねらいは、他の人に「へえ、なるほど」と思ってもらえる内容を書くことである。学生は大学の授業の中で、正しい答えを書くことに慣れ親しんでいるが、この授業では、平凡な内容だと小論文の評価が低くなることを学生に伝える。そして平凡でありきたりの内容にならないように、自分の体験やニュースなどから興味深い出来事を探し、それを自分の言葉で考察するように指導している。

小論文の指導においては、論文の構成や発想法などを伝えることが重要である。しかし問題はそのようなことを伝えれば伝えるほど、学生はその方法を真似することに労力を注ぐように

現代社会で要求される情報活用能力	400字
若者の離職を防ぐには	400字
「ことば」	500字
「時代」	500字
「社会」	600字
「闇」	600字
「社会」	600字
「不安」	600字
「グローバル」	800字
「仕事」	800字
「経済」	800字
「時代」	1200字
今までのテーマから	1200字

表3 小論文テーマ一覧

①前回までの小論文評価成績の返却	10分
②提出された小論文の学生相互評価	約25分
③相互評価の優秀作発表と講評	約25分
④小論文作成のポイントの講義	約20分
⑤次回的小論文テーマの発表	約10分

表4 90分の授業構成

なってしまう。この点を是正するために相互評価法は効果がある。

### 3) データを多様に解釈する面白さを伝える 「社会調査法 I」

この授業は社会調査の方法とその面白さを伝えるための、100人ほどが受講する入門的授業である。この授業でもアンケート調査から得られた興味深いデータを考察するレポートを数回(3~4回)実施し、レポート相互評価を行っている。(この論文で使用したレポート相互評価例はこの授業で実施したものである。)

社会調査の面白さは、得られたデータをさまざまに解釈して、興味深い考察を引き出すところにある。しかし100人を超える授業では、このもっとも興味深いところを十分に学生に体験させることが難しく、社会調査実施の細かな手続きを講義するだけにとどまることが多かった。この授業では、過去に行われた興味深い、解釈のしがいのある調査結果を提示したうえで、考察を学生に考えさせ、相互評価を実施している。学生に対しては、「他の学生に、へえ、なるほどと思ってもらえるような、考察を行いなさい」と課題を提示している。

この授業は必ずしもレポート指導を主目的とした授業ではない。しかしこのような授業においても、レポート相互評価法を組み込むことで、学んだ内容を発展させて、自由に発想することの面白さを授業の中に伝えることができる。

おそらく大学の多くの授業は、学んだ内容自体を覚えることよりも、その学んだ内容を使って、さらにさまざまな問題に対して発想を広げていくことを目指す授業が多いはずである。そのような授業にあっても、このようなレポート相互評価法は利用できる。

## 6. まとめと今後の課題

### 1) 相互評価法のメリット

学生は学生同士の仲間集団に強く帰属しているようである。教員がどんなに熱く学問的価値を語っても、学生集団内でその価値が共有されていなければ、教員の声は学生の耳には届かない。

このレポート相互評価法は、仲間へ帰属する現代学生の性質を逆に利用する試みである。この方法は他の学生に自分がどのように見られているかを意識させる。教員の視線ではなく、同じ学生の視線を意識させることがこの方法の強みである。このことを通じて、よいレポートを書くという方向に学生の動機づけを誘導する。このようなレポート相互評価法がうまくいけば、レポートを書く上での学生の創意工夫を誘発する。人とは異なる意外な発想を書こうとする学生、資料を調べて書き込もうとする学生、大人びた専門用語を使って書こうとする学生。こうした学生の創意工夫は、高い評価を受ける場合もあるし、低い評価を受けることもある。しかし学生たちは、評価の結果を参考にしながら、次のレポートを書く際にさまざまな戦略をめぐらし、レポートを書く。つまり学生は評価者の視点を意識してレポートを書くようになる。この点が教育上の最大のメリットである。

またこのレポート相互評価法は、教員が学生の評価の視点を理解するのに役に立つ。つまり学生が何に影響され、よいものと悪いものを区別しているかを理解するのに役に立つ。

学生の評価の視点は、必ずしも教員の評価の視点と同じではない。一般に大学の教員は自らの視点だけに立って、学生に対して一方的に知識や技能を伝達しようとしがちである。しかし教員が授業で伝えたと思っていることは、そのままの形で学生に消化されているわけではない。

このレポート相互評価法を実施すると、よいと評価されるレポートが教員の評価と一致しないことが生じる。このことを痛感するのは、教員が模範だと考える自分自身のレポートを相互評価に混ぜて学生に評価させた場合である。必ずしも教員が書いた模範レポートが高い評価とならずに、他の学生のレポートに得点で負けるケースが出てくる<sup>6</sup>。教員としてはかなり悔しい思いをするが、この評価のズレこそ、授業の中で埋めていかなければならないズレである。

## 2) 今後の課題

このレポート相互評価法はレポートの評価を計量化する。その点で学生の成績評価の重要な指標になるかもしれない。しかしこの点ではまだまだ検討していく問題も多い。特にこの点で重要なのはこの相互評価の信頼性と妥当性の検証である。

相互評価法を用いると、上位および下位レポートの評価結果はおおむね妥当だが、中位のレポートの評価結果は誤差が大きいという印象がある。おそらくこの問題は、ランダムに組み合わせたレポートを評価するという手法の持つサンプリング誤差の問題の一つはあるだろう。もう一つは、評価する学生が中位のレポートの良し悪しを区別できないということがあるかもしれない。つまり学生はいいレポートと悪いレポートを見分けることができるが、中位のレポートを区別することができないということがあるようだ。また学生は相互評価を繰り返し実施する中で、評価者の視点が育ち、定まっていく。とするとどのような学習段階に到達した学生集団はどのようなテーマについて妥当な評価を下せるようになるかについても検証がいるだろう。

以上のようにレポート相互評価法には今後、検証していく課題も多い。しかしレポート相互評価法という方法は、学生に動機づけを与えて指導していくことが難しかったレポート指導という分野に、新たな教育上の手がかりを与える方法であることは間違いのないだろうと思う。

## 注

- <sup>1</sup> 日本の多くの大学で期末に1回だけのレポート課題が設定され、返却されない現状と問題点については、池田ら（2001, p.119）を参照。
- <sup>2</sup> このような従来の相互評価がどのようなものかという点、次のような文章から推測される。「総合的な学習などにおける中間発表会などは、この種の相互評価の典型的な場面だと解される。この相互評価は、しっかりと学級づくりやグループづくりをしておかないと、ただ仲間をけなし、自分を優れたものとする差別意識を助長する危険があるが、概して子供たちはお互いに褒め合い、励まし合うものである。」（安彦忠彦 2006）
- <sup>3</sup> この評価させるレポート数は、評価の精度にも関連する。統計的誤差だけを問題にすれば、当然、レポート数が多いほど精度があがる。提出された100レポートについて、ランダムな8レポートの組み合わせを8人に評価してもらった場合、もっとも誤差の大きい50位付近で、標準誤差6.5位ほどである。中位のレポートがもっとも誤差が大きい、最上位、最下位のレポートの誤差は小さい。
- <sup>4</sup> この論文で紹介するレポートはレポートとしては非常に短い分量のものである。その理由の一つは量的にこの論文に掲載しやすいためである。もう一つはレポートを書ききれない1年生を対象にした相互評価を示すことで、この方法の効果を分かりやすくするためである。しかし、レポート相互評価法は必ずしも、このような短い分量に限定されるわけでは



ない。ただし、受講者が大人数になると、長い分量のレポートを相互評価させるためには組み合わせ作成などの準備作業が多くなるため、試みるには短めのレポートから始めるほうがよいかもしれない。

- 5 この相互評価では字数と評価結果の相関係数は0.37であり、明確な関連が見られる。
- 6 たとえば、「暴走族にとっての20歳の意味」レポートで教員が作成した模範レポートは、84人中19位であった。また「50年前にくらべ、あの世を信じている若者が増えてきている理由の分析」では、21位（83人中）であった。授業ではこの結果を学生に伝え、「今回は悔しいが、先生も次はがんばる」と話すと、次の相互評価が盛り上がる。

### 引用・参考文献

- 天野正輝 2006 「評価の主体と対象」（辰野千壽ほか監修『教育評価事典』図書文化社）。
- 安彦忠彦 2006 「自己評価と相互評価」（辰野千壽ほか監修『教育評価事典』図書文化社）。
- 橋本重修 1976 『新・教育評価法総説 下巻』金子書房。
- 池田輝政・戸田山和久・近田正博・中井俊樹 2001 『成長するティップス先生——授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部。
- 佐藤郁哉 1985 『ヤンキー・暴走族・社会人』新曜社。
- 安彦忠彦 1987 『自己評価—「自己教育論」を超えて』日本図書文化協会。
- 統計数理研究所 1958,2008 「日本人の国民性調査」<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>（閲覧日 2010.1.28）